

Title	「洪熙の残照」の清書を手伝って
Sub Title	参与《洪熙の残照》缮写的感想 Assisting with the final editing of Afterglow in Hong Xi Street
Author	上田, 裕子(Ueda, Yūko)
Publisher	「満洲の記憶」研究会
Publication year	2024
Jtitle	満洲の記憶 No.10 (2024. 12) ,p.107- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32003001-20241200-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「洪熙の残照」の清書を手伝って

上田 裕子

5冊の大学ノート

細かい文字でびっしりと書き込まれている分厚い5冊の大学ノートを前にしたとき、奥村松平さんはどのようなお考えで、この「洪熙の残照」を書かれたのだろうか、私は繰り返し思いつつパソコンを打ちました。別冊の資料集といえるような大学ノートには、たくさんの新聞の切り抜きやメモ書きが貼ってありました。できる限り正確に書き残そうとされた松平さんの強い意志を感じさせられる特別のノートでした。

私は旧満洲(中国東北部)生まれです。1943年3月に新京特別市(現、長春市)で生まれました。敗戦後1年を新京で過ごし、1946年8月、3歳の私は栄養失調のため「煮干しのような子」といわれる状態で日本に帰ってきましたが、残念なことに満洲の記憶はまったくありません。ですから、松平さんの文章は、私の知らない生まれ故郷を描いていると思われて、何回も読み返しました。また5年前に98歳で亡くなった母の半生記「弧蓬万里征」もそのつど開きました。そのなかに「私たちの社宅の隣の建物がソ連国家政治保安部(ゲ・ペー・ウー)の本部になったので、暴民にもソ連兵にも襲われない安全地帯になりました」という箇所があります。松平さんはソ連軍や八路軍に3回も

拘束されています。そのことを考えあわせると、私の両親と奥村松平さん一家とは本当に近い空間で戦後の混乱期を過ごしていたのだと気づかされました。

生まれ故郷を訪ねて

母は混乱のなかを40キロのリュックを背負い、3歳の私の手を引き時には抱いて、泥濘の道を歩き、雨の中を無蓋列車で移動しながら帰国した経験があったからでしょうか。戦後は貧しい生活のなかでもアジア太平洋戦争とは何であったのかについて学び、熱心に平和運動をするようになりました。そんな母をねぎらいたいと、子どもたちが中国旅行を計画した時、「日本国政府がきちんと謝罪しないうちは満洲へは行かない」と拒否をしたのでした。けれども私たち1940年代生まれの世代は旧満洲生まれでありながら、自分の生まれ故郷の記憶がほとんどなく、一度も訪ねたことがない人が多くいます。職場の同僚のなかにもそんな人が何人もいて、時に生まれ故郷を訪ねたいという話が出ましたが、実現に至りませんでした。旧満洲生まれの仲間の一人が余命宣告を受けたことを契機に、2019年に友人2人と奥村武彦さんと私の4人で旧満洲への旅に出かけました。

中国での最初の訪問先は大連、奥村松平さんの最初の赴任地です。長男の武彦さんは、訪中4人のなかでは年長で、いくらか満洲の記憶を持っています。まずは奥村さんご一家の思い出が詰まっている旧星が浦公園（現、星海公園）に行きました。星が浦の海岸に立つとお母さまが沖に向かって泳いでいく姿を思い出すと言いながら、水平線の彼方を見ている武彦さんの後ろ姿を今も思い出します。

次の長春（旧新京）では、松平さんが勤務していた南満洲瓦斯（株）のガス塔を見つけることができて、複雑な思いでその前での記念写真を撮りました。また長春は私の生まれた町でもあります。母の半生記には当時の住まいについて「天寶街と西朝陽路の交差するところに農地開発公社の社宅があった」とありますので、ガイドさんが古い地図を参照して、この辺りだと案内

してくださいました。松平さんや母の存命中に、こういう旅をしたかったと強く思いましたが、それを叶えることはできないという現実があります。親の存在とは、きっとそういうものなのでしょう。私たちは親たちが残してくれたもの、奥村松平さん著『洪熙の残照』や上田マリ著『弧蓬万里征』を繰り返し開いては、話しかけ語り合うしかありません。



旧大連満鉄本社前にて（2019年10月17日）

註：一番右は筆者、右から二番目は奥村武彦さん。

筆者所蔵